

- 1 朧夜の手首は腕をはなれたい――
- 2 枕辺にまた貌鳥の立つ気配――
- 3 白梅のまはりを時のとどこほる――
- 4 鶯を匿ふための身八ツ口――
- 5 かくされて雛のあそびを百千度（ももちたび）――
- 6 幼子といふかぎろひに近きもの――
- 7 かなりあかなりあはるのうれひをうたはぬか――
- 8 花時の指に冷たき阿闍梨餅――
- 9 飛花落花見失つてもかまはない――
- 10 神仏のしづかな咀嚼蝶の昼――
- 11 かるがると地を捨ててゆく雲雀かな――
- 12 蒿苣割るや星雲どつと回りだす――
- 13 ぼうたんの玉なす蕾目覚めるな――
- 14 新樹一叢掠めて地下鉄は地下へ――
- 15 大手鞠咲くテロリスト養成所――
- 16 正しさのなんと危ふきジギタリス――
- 17 うつし身のうつろほうたる湧きいづる――
- 18 わたし忌の夏蝶なべて狂ふべし――
- 19 桜桃忌つめたくほろびゆくチーズ――
- 20 眠剤のかそけき光百合の蕊――
- 21 うすべにの局所麻酔のさるすべり――
- 22 葛切の夜に擬態してゐる水か――
- 23 畜肉のゆつたり腐る冷蔵庫――
- 24 すはだかの羊まばらに夏の雨――
- 25 空蟬にかすかな夜気の満ちて引く――

- 26 〔瞼(まなぶた)にうすき黒子や星涼し〕
- 27 〔夏の月しらしらと夜へ還り来る〕
- 28 〔手鏡に吐いてかげろふほどの息〕
- 29 〔カラフルに穢されて在る夏の浜〕
- 30 〔微電流芳しパイナップル食めば〕
- 31 〔降りしきるプールぬくとし息を吐(つ)く〕
- 32 〔するするとひらかれからすうりの花〕
- 33 〔白粉の匂ひ阿蘭陀獅子頭〕
- 34 〔角隠泉の底へまゐらうか〕
- 35 〔夕焼の耿耿と何屠りたる〕
- 36 〔放られて不滅の桃となりにけり〕
- 37 〔雨脚の青白くさす真葛原〕
- 38 〔いうれいが茗荷の花を喰つてゐた〕
- 39 〔銀漢の残滓と思ふ嘔吐かな〕
- 40 〔熱の夜の枕辺を鳴くひぐらしよ〕
- 41 〔溢蚊のいのち無色に打たれけり〕
- 42 〔半跣思惟月に降る雨甘からむ〕
- 43 〔うつとりと肉(しし)をはなるる花野かな〕
- 44 〔片寝して颱風の産声を聴く〕
- 45 〔踊り字のうつむきがちのゐのこづち〕
- 46 〔豆板の豆の断面冬に入る〕
- 47 〔うどんつるつる毎日が憂国忌〕
- 48 〔純化して鈍化してうつろな驚よ〕
- 49 〔少年の睫毛に雪の来て触れず〕
- 50 〔凍滝のなかは真つ赤に燃えてゐる〕

- 51 初笑してあつけなく去つてゆく――
- 52 抜き出せば鳥類図鑑よく冷えて――
- 53 咳に覚めて鱗をこぼしをり――
- 54 風邪の耳いま海溝を墜ちゆくか――
- 55 覚めぎはに鼻のこゑして空虚――
- 56 しろがねの匙春を待つさむげたん――
- 57 恋猫の壊れて直る仕組かな――
- 58 豆がちの豆大福や春炬燵――
- 59 蛇すでに出でたる穴か確かめよ――
- 60 水草生ふ情死のきはもそののちも――
- 61 巻尺のびつとをさまるつばめかな――
- 62 すかんぼや意外にとほく飛ぶ眼鏡――
- 63 目であつたところが痒い春の雲――
- 64 引き攀れの広がつてゆく海胆の夕――
- 65 うつつと花菜明りを吸ふガアゼ――
- 66 額に手をあてられてゐて春の鹿――
- 67 かんたんに人死ぬ寓話花いばら――
- 68 舞へ舞へと蝸牛の王の宣ふに――
- 69 きらきらと毛虫を殺め華鋏――
- 70 少年のくるぶし尖る椎の花――
- 71 雲垂れこめて街はおもたいゼリー――
- 72 長梅雨や飼はるることの気やすさに――
- 73 羊水の匂ひ知らざり冷し瓜――
- 74 未成年ひとり容れたる蛭狩――
- 75 あたま悪さうに氷菓を齧るなり――

- 76 目に入れて目薬甘し夏の月――
- 77 はんぎきの水のそこひに吐く水は――
- 78 ほろびのちとはの晴天金魚玉――
- 79 開けても開けても海鳴りの夏座敷――
- 80 金魚の尾どこまで裂くる少年期――
- 81 はだかに剥かれ玉葱の明晰夢――
- 82 横貌の青年となるプールかな――
- 83 むつすりと日焼の腕を寄越しけり――
- 84 切髪の燦燦と散る天の川――
- 85 恋かも知れぬ下手な踊についてゆく――
- 86 芋虫の次も芋虫ですか 主よ――
- 87 まばたきがうまくできない鶏頭花――
- 88 草雲雀みづのけはひのただなかに――
- 89 藤の実のぞろりぞろりと知らない子――
- 90 それからのゆるやかな死後烏瓜――
- 91 冴ゆる月クリーム鎖骨までのばす――
- 92 眠らねば鮫がまなこを嗅ぎにくる――
- 93 身じたくを終へて冷たき指環嵌む――
- 94 奈落よりイエスせり出す聖夜劇――
- 95 雷鳥のグリエへ冷えびえとナイフ――
- 96 暗紅の腑は狼に取つてある――
- 97 重箱の拭漆より霜の声――
- 98 春着解く荒荒と紅拭ひ取り――
- 99 雪を来てひらく獣の掌――
- 100 旋回の鯨よ炉心は燃えてゐるか――